福田寺の十一重塔

ふくでんじのじゅういちじゅうのとう

文化財愛護シンボルマーク

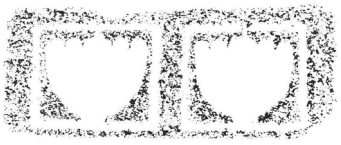
名　　称	福田寺の十一重塔	所 在 地	加古川市加古川町稲屋 607 番地
別　　称	福田寺の層塔、福田寺の十三重塔	所 有 者	福田寺
数　　量	１基	指　　定	兵庫県指定文化財
寸　　法	総高 355cm（基礎－笠最上段）	指定分類	建造物
材　　質	石造、花崗岩	指定名称	石造十一重塔
時　　代	鎌倉時代後期　正和２（1313）年	指定年月日	昭和 51（1976）年３月 23 日

福田寺の十一重塔

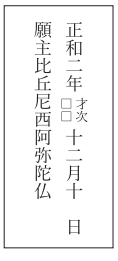
福田寺は、加古川町稲屋に所在し、飛鳥時代に聖徳太子によって開かれたと伝わる寺院です。山門を入って左側に建っている層塔は、塔身の銘文から鎌倉時代後期の正和２（1313）年に造立されたことが明らかで、紀年銘がある層塔のなかでは市内で最も古いものです。

この層塔は、笠を 11 層積んでいるため十一重塔と呼ばれています。ただ、全体の形状から本来は十三重塔であったと考えられ、現在は笠を２層失っている状態といえます。

基礎は、背が低く、各側面に２区の輪郭を巻き、それぞれの内に格狭間を刻んでいます。



基礎 拓本



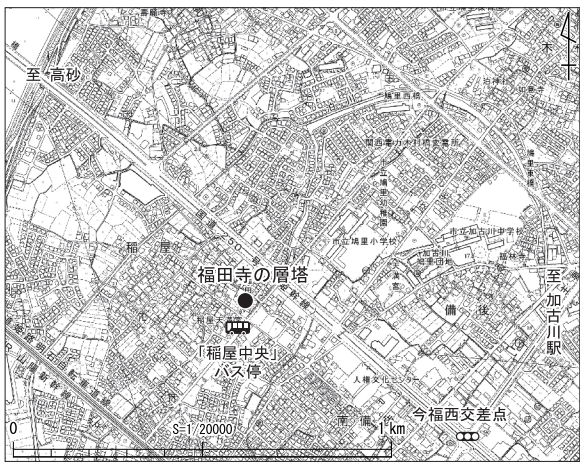
塔身 銘文

塔身 拓本

塔身は、密教における金剛界四仏とみられる本尊を刻んでいます。現在の北西面に種子 𑖀（ウーン／阿閦如来）、ほかの３面には仏坐像を舟形輪郭の内に彫り出しています。このような種子と仏像を併用する配置は珍しい事例です。北東面の仏坐像の両脇に銘文がありますが、風化が進み、現在は判読が困難になっています。

笠は、屋根の上に上層の軸部を低く造り出したものを 10 層積み、最上層には相輪を受ける露盤を設けた笠（天井部）を載せています。

相輪は欠失しており、現在は自然石が置かれています。



塔は、風化によって摩耗や欠失が目立ちますが、笠の軒反りには力強さが残り、堂々とした鎌倉時代後期の様式を保っています。均整がとれた形態に加え、石材に花崗岩を用いていることからも、中世の石工集団「伊派」のうち、六甲山地から産出される御影石を使用していた西摂石屋が造立に携わったと考えられています。

加古川地域には鎌倉時代後期に造られた多くの石塔が存在しています。なかでも正和年間（1312 ～ 1317 年）には、西大寺系律宗の勧進によって優れた石塔が複数造立されています。福田寺に遺るこの層塔についても、同様の流れの中で造立されたものとみられ、地域の歴史を考えるうえで貴重な石造文化財のひとつといえるでしょう。

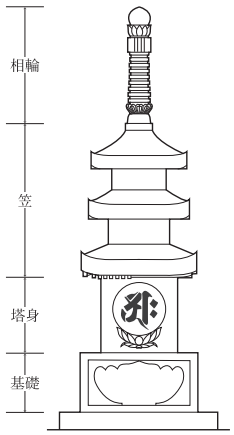
また、江戸時代の地誌『播磨鑑』によると、福田寺周辺はかつて大津千軒村と呼ばれていたようです。「津」は現在の港湾にあたる場所のことで、旧加古川の河口近くに位置していたこの村が港町として栄え、多くの家々が軒を連ねていた風景を、古記録に残る地名から想像することができます。

（拓本／『加古川市史 第七巻』より転載、文・写真／古林）

層塔

仏教とともに大陸から伝来した仏塔で、屋根と軸部を積み重ねた形をしています。屋根は奇数で造られ、三重から十三重まで（十一重を除く）があります。

伝来当初の作品は建築物の木造塔を模した例が散見されますが、より簡略化された石造層塔の様式が次第に定着します。



●参考文献
『加古川市史 第七巻』加古川市（1985 年）
『日本の石造層塔』福地謙四郎、理工学社（1986 年）

●キーワード
石造美術　石塔　層塔　十三重塔　福田寺　正和二年

●所在地／兵庫県加古川市加古川町稲屋 607 番地

●交　通／ＪＲ加古川駅発かこバス鳩里・尾上ルート「稲屋中央」下車すぐ。又は、山陽電車尾上の松駅から北西へ徒歩約 23 分

編集・発行：加古川市教育委員会　文化財調査研究センター
令和６年３月 31 日（2024. 03. 31 ／ 1000）